

さあ！ひろげよう！「地域と共にある学校づくり」

「地域と共にある学校づくり」とは

- 近年、子どもたちを取り巻く環境が大きく変化し、地域の教育力の低下が指摘されています。県内の公立幼稚園、認定こども園、小・中学校では、本県の子どもたちの教育課題である規範意識や社会性の向上等を図るため、保護者や地域住民が学校の教育活動に参画し、教職員と「熟議※①参照」し、協働することを通して、地域ぐるみで子どもたちを育む活動を展開しています。この一連かつ継続的な取組が、「地域と共にある学校づくり」です。



- 「地域と共にある学校づくり」においては、学習等支援活動（放課後や休日に実施されるものを含む）、環境整備活動、登下校の安全見守り活動、学校行事支援、特別活動の支援など様々な「地域学校協働活動※②参照」が行われています。

- なお、県内の多くの園・学校は、「奈良県学校・地域パートナーシップ事業（国の補助事業）※③参照」を活用し、「地域と共にある学校づくり」の充実を図っています。また「コミュニティ・スクール（学校運営協議会制度）※④参照」の導入を通じて、取組を推進している学校も増えています。

「地域と共にある学校づくり」の期待される効果は

►►►► 地域住民の教育活動への協力が進みます

地域住民が学校を訪れる機会が増え、教育活動全般について知る機会が増えることから、地域を開かれた「わたしたちの学校」という意識が生まれます。



►►►► 子どもたちの規範意識・社会性が向上します

様々な体験活動等を通じて、異なる世代の方々と交流する機会が増え、多様な価値観に触れることから、地域をより良くしようとする意識が芽生え、子どもたちの規範意識・社会性が向上します。

►►►► 安全・安心なまちづくりが進みます

子どもを見守る大人の数が増え、集まった地域の方々による交流の輪が広がることから、安全・安心なまちづくりにつながります。



►►►► 地域の活性化、地域の教育力の向上につながります

地域住民同士の交流が進めば、お互いの人間関係が広がり、地域が活性化します。また、地域住民が自らの知識や経験を活かして、学校と協働した取組を進めることで、地域の教育力が向上します。



地域コーディネーターって何だろう？

「地域コーディネーター」とは

「地域と共にある学校づくり」を進めるにあたり、学校と地域人材（地域ボランティア等）、地域人材間の連絡・調整を行い、実質的な運営を担う地域人材を地域コーディネーターといいます。

「地域コーディネーター」って何をすればいいの？

- 地域と学校を上手につないでいただく役割
- 学校の立場を代弁し、地域人材の思いも理解できる橋渡し役

地域や学校の在り方は多様です。そのため、それらをつなぐ「地域コーディネーター」の役割も千差万別です。

そっと教えましょう！「地域コーディネーター」の 極意

《例えば》学校との関わりにおいての役割は

■ 学校の思いやニーズを把握、教職員と顔の見える関係づくり

定期的に学校を訪問し、管理職や担当教職員等と面談する。

職員会議や全校朝会で、教職員や子どもたちに紹介をしてもらう。

学校に部屋や机を用意してもらい、相談しやすい体制をつくる。

■ 学校と地域の「熟議」の場（コミュニティ協議会等）に参画

地域の子どもたちに対する思いを伝える。

教職員と「どのように子どもを育むのか」を共有する。

学校と協働して、具体的な取組を企画・立案する。



■ 地域と学校の温度差を調整

学校の思いやニーズをしっかりと地域ボランティアに伝える。

地域ボランティアから具体的な活動の希望がある場合は、学校に伝え実施について調整する。

学校の立場で、地域ボランティアにお礼を言う。

《例えば》地域との関わりにおいての役割は

■ 地域や保護者との子どもたちに対する思いの把握

地域での各種会合や活動に参加し、地域住民との関係をつくる。

PTAの会合に参加し保護者との関係をつくる。



■ 「地域と共にある学校づくり」について知らせる

様々な機会を通して「地域と共にある学校づくり」について広報する。

学校からのニーズを調整して、地域ボランティアを募集する。



■ 取組に関わる人・団体の発掘とつながりづくり

地域の団体等で、学校と協働することにより、教育活動等で成果が期待できるところを洗い出し、つながりをもつ。



こんな時はどうしたらいいのだろう？ 先輩コーディネーターは、こうして乗り越えた

新しいボランティアを見つけることが難しいです。



PTA会長に、親世代へのボランティア参加の呼びかけをお願いすると、増えました。

地域の会合等で、自治会長に相談したり、老人会や民生委員に呼びかけたりしています。

ボランティアと教職員との接点が少ないです。



一緒に作業をする機会・活動があったことで、お互いの距離が縮まりました。

ボランティアが教室に入ることに抵抗感がある教職員もおられます。



学校と相談して、学校で知り得た情報を漏らさないなどの決まりをつくり、支援に入る前にボランティアに伝えています。

ボランティアがしたいことを学校に押しつけないように心がけています。

熟議が不足しています。教職員と情報交換を十分に行っています。



美化運動、園芸等、学校に入りやすい活動から始め、関係をつくり、まずは管理職と話の出来る関係になりました。

活動後に、子どもたちの様子や反省を教職員とボランティアが短時間で交流しています。

学校が、ボランティアに何をしてほしいか定まっていません。



学校へはこまめに出向いて、教職員や子どもたちとふれあう機会をもっています。そうすることで、学校が地域にお願いしたいことが分かってきました。

地域には、専門的な知識を持っている人、ボランティアをやってみたいと思っている人が、たくさんいます。子どもや地域のことを思って行動するコーディネーターの姿が、そのような人たちを学校へと集わせます。

